

◎法然上人 [1133-1212]

- ・1133年4/7 岡山県美作（みまさか）生まれ。
- ・1141年、土地争論関連で、父が殺害される。
- ・1145年、比叡山に。
- ・1175年、善導により回心。比叡山を下りる。
- ・1198年、『選択本願念仏集』執筆。
- ・1201年、親鸞上人 [1173-1263]、六角堂で参籠、その後、法然上人を訪ねる。
- ・1207年、後鳥羽上皇により、念仏停止の断が下された。四国に配流。
- ・1212年、京都東山で亡くなる。

●1. [法然上人自身の迷い体験]

有る時上人、予に語りての給わく、法相・三論・天台・華嚴・真言・仏心の諸大乘の宗、遍学し悉く明らむるに入門は異なりといえども、皆仏性の一理を悟顕することを明かす、所詮は一致なり。法は深妙なりといえども我が機すべて及び難し。経典を被覧するに其の智最愚なり。行法を修習するに其の心翻じて昧し。朝朝に定めて悪趣に沈まんことを恐怖す、夕夕に出離の縁の欠けたることを悲歎す。忙々たる恨みには渡りに船を失うがごとし、朦朧たる憂いは闇に道に迷うがごとし。歎きながら如来の教法を習い、悲しみながら人師の解釈を学ぶ。黒谷の報恩蔵に入りて、一切経を披見すること既に五遍に及びぬ。しかれども猶いまだ出離の要法を悟り得ず、愁情いよいよ深く、学意ますます盛んなり。

ここに善因急に熟し宿縁頓に顕れ、京師善導和尚勸化の八帖の書を拝見するに、末代増悪の凡夫、出離生死の旨をたやすく定判し給えり。ほぼ管見していまだ玄意を曉らめずといえども随喜身に余り、身毛いよだちてとりわき見ること三遍、前後合して八遍なり。

時に観経散善義の、一心専念弥陀名号の文に至りて善導の元意を得たり。歡喜の余りに聞く人なかりしかども、「予が如き下機の行法は、阿弥陀仏の法蔵因位の昔かねて定め置きたるるをや」と、高声に唱えて感悦髓に徹り、落涙千行なりき。終に承安五年、乙丑（きのとうし）の春 [1175年]、齡四十三の時たちどころに余行をすてて一向専修念仏門に入りて、始めて六万遍を唱う。『ご法語 ③31頁』

●2. [戒定慧の三学を学んでも]

出離の心ざしいたりてふかかりしあいだ、もろもろの教法を信じて、もろもろの行業を修す。およそ仏教おおしといえども、詮ずるところ戒定慧の三学をばすぎず。いわゆる小乗の戒定慧、大乘の戒定慧、顕教の戒定慧、密教の戒定慧なり。しかるにわがこの身は、戒行において一戒をもたもたず、禪定において一つ

もこれをえず、智慧において断惑証果の正智を得ず。… なんぞ生死繫縛の身を解脱する事をえんや。かなしきかな かなしきかな、いかがせん いかがせん。

『ご法語②37 頁』

● 3. [1175 年の回心体験]

ここにわがごときは、すでに戒定慧の三学のうつわ物にあらず、この三学のほかにわが心に相応する法門ありや。わが身にたえたる修学やあると、よろずの智者にもとめ、もろもろの学者にとぶらいしに、おしうる人もなく、しめすともがらもなし。しかるあいだ、なげきなげき経蔵にいり、かなしみかなしみ聖教にむかいて、てずから身うからひらきて見しに、善導和尚の観經の疏にいわく、「一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問はず、念々に捨てざる者、是を正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」という文を見えてのち、われらがごとくの無智の身はひとえにこの文をあおぎ、もはらこのことわりをたのみて、念々に捨てざるの称名を修して、決定往生の業因にそのう〔備える〕べし。ただ善導の遺教を信ずるのみにあらず、又あつく弥陀の弘願に順ぜり。彼の仏の願に順ずるが故にの文ふかくたましいにそみ、心にとどめたるなり。『ご法語②175 頁』

● 4. 浄土の人師多しと雖も、皆菩提心を勧めて観察を正となす。唯、善導一師のみ菩提心無くして往生を許す。観察を以ては称名の助業と判ずと。当世の人、善導の意に依らざれば、すなわち往生を得ず。『ご法語②150 頁』

● 5. 念仏申にはまたく別の様なし。たゞ申せば極楽へむまると知て、心をいたして申せばまいるなり。（勅修御伝 21 卷）

● 6. 念仏の機は、ただ生れ付きのままにて、申して生るるなり。…智者は智者にて申して生れ、愚者は愚者にて申して生れ、道心有る人も申して生れ、道心なきも申して生れ、邪見に生れたる人も申して生る。富貴の者も、貧賤の者も、欲ふかき者も、腹あしき者も、慈悲ある者も、慈悲なき者も、本願の不思議にて念仏だにも申せば、みな往生するなり。…ただごさかしく機の沙汰をせずして、念仏だにも申せば、皆悉く往生するなり。『ご法語③79 頁』

● 7. 玄義に釈迦の要門は、定散二善なり。定とは息慮凝心なり。散とは廃悪修善なり。弘願とは大經に説くが如く、一切善悪の凡夫生ずることを得といえり。余がごときは、さきの要門にたえず。よってひとえに弘願をたのむなり。

しかるに常没の凡愚、定心修し難し、息慮凝心の故に。

散心行じ難し、廃悪修善の故に。（親鸞）

● 8. 凡そ、聖道門は智恵を極めて生死を離れ、浄土門は愚痴に還りて極楽に生ず。所以は、聖道門におもむく時、智恵をみがき禁戒を守り、心性を浄むるを以て宗となす。然るを浄土門に入る日（とき）、**智恵をもたのまず、戒行をも護らず、心器をも調えず**、只々甲斐無く無智者と成らば、本願をたのみて往生を願うなり。…源空が念仏申すも一文不通の男女にひとしうして申すぞ、**全く年来修学したる智恵をば一分もたのまざるなり**。

● 9. この**真如観**はし候べき事にて候か。

答。これは恵心のと申て候へども、**わろき物にて候也**。おほかた真如観をば、われら衆生は、えせぬ事にて候ぞ、往生のためにもおもはれぬことにて候へば、無益に候。

● 10. 上人つねに仰られける御詞

また云く。**本願の念仏には、ひとりだちをせさせて、すけをさゝぬなり**。すけといふは、智恵をもすけにさし、持戒をもすけにさし、道心をもすけにさし、慈悲をもすけにさすなり。

善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して、たゞむまれつきのまゝにて念仏する人を、念仏にすけさゝぬとは云也。

さりながら、「**悪をあらため、善人となりて念仏せん人は、仏の御心に叶べし、かなはぬ物ゆへに**」、とあらんかからんと思て、決定心おこらぬ人は、往生不定の人なるべし。

● 11. 室の泊の箇所

同国室の泊につき給に、小船一艘ちかづきたる、これ遊女がふねなりけり。遊女申さく、

上人の御船のよしうけたまはりて推参し侍なり。世をわたる道まちまちなり。いかなるつみありてか、かゝる身となり侍らん。この罪業おもき身、いかにしてかのちの世たすかり候べきと申ければ、上人あはれみでの給はく、

げにもさやうにて世をわたり給らん罪障まことにかろかざれば、酬報またはかりがたし。もしかゝらずして、世をわたり給ぬべきはかりごとあらば、すみやかにそのわざをすて給べし。もし余のはかりごともなく。又身命をかへりみざるほどの道心いまだおこりたまはずば、**たゞそのまゝにて、もはら念仏すべし。弥陀如来は、さやうなる罪人のためにこそ、弘誓をたてたまへる事にて侍れ**。

たゞふかく本願をたのみて、あへて卑下する事なかれ。本願を憑て念仏せば、往生うたがひあるまじきよし、ねんごろにをしへ給ければ、遊女随喜の涙をながしけり。

● 12. いけば念仏の功つもり、しなば浄土へまいりてなん。**とてもかくて**

も、此身には思ひわずらふ事ぞなきと思ぬれば、死生共にわづらひなし。

●13. たどひ余事をいとなむとも、念仏を申々これをするとおもひをなせ。余事をしし念仏すとはおもふべからず。

●14. 人の命は食事の時、むせて死する事も有なり。南無阿弥陀仏とかみて、南無阿弥陀仏とのみ入べきなり。

●15. 人々のあるいは堂をもつくり、仏をもつくり、経をもかき、僧をも供養せんには、**ちからをくわえ縁をむすばんが、念仏をさまたげ、専修をさうるほどの事は候まじ。**『ご法語①82頁』

●16. この世のいのりに、仏にも神にも申さん事は、そもくるしみ候まじ [差し支えなし]。後世の往生、念仏のほかにあらぬ行をするこそ、念仏をさまたぐれば、あしき事にて候え。**この世のためにする事は、往生のために候わねば、仏神にいのり、さらにくるしかるまじく候なり。**『ご法語①83頁』

●17. 武蔵国の御家人、猪俣党に、甘粕の太郎忠綱と云ふ者侍りき。ふかく上人に帰し、念仏の行をこたりなかりけり。しかるに山門の堂衆等、独歩のあまり、衆徒を忽諸し、日吉八王子の社壇を城郭として、悪行をたくみしかば、武士をさし遣はしてせめられし時、忠綱勅に応じて、建久三年十一月十五日、かの城郭にむかふに、まづ上人に参じて申す様、

「我等如きの罪人なりとも、本願を頼みて念仏せば、往生疑ひなき旨、日来御教を承りて、ふかく其の旨を存ずといへども、それは病の床に臥して、のどかに臨終せん時の事なり。武士のならひ、進退心にまかせざれば、山門の堂衆を追討のために、勅命によりて、只今八王子の城へ向ひ侍り。忠綱武勇の家に生まれて、弓箭の道にたづさはる。すすみては父祖の遺塵をうしなはず、しりぞきては子孫の後栄をのこさんがために、敵をふせぎ、身をすてば、悪心熾盛にして願念発起しがたし。もし今生のかりなるいはれを おもひ、往生のはげむべきことほりをわすれずば、かへりて敵のためにとりこにせられなん。ながく臆病の名をとどめて、忽ちに譜代の跡をうしなひつべし。**いづれを捨て、いづれを取るべしといふ事、愚意わきまへがたし。弓箭の家業をも捨てず、往生の素意をもとぐる道侍らば、願はくは御一言を承らん**」と申しければ、上人仰せらるる様、

「弥陀の本願は様の善悪をいはず、行の多少を論ぜず、身の浄不浄をえらばず、時処諸縁を嫌はざれば、死の縁によるべからず。悪人は悪人ながら名号を称へて往生す。これ本願の不思議也。弓箭の家に生れたる人、たどひ軍陣にたたかひ命を失ふとも、念仏せば本願に乗じ来迎に預らん事、ゆめく疑ふべからず」と、こまかに授け給ひければ、不審ひらけ侍りぬ。さては忠綱が往生は、今日一定なるべしと悦び申しけり。上人の御袈裟給はりて、鎧のしたにかけ、それよりやがて、八王子の城へ向ひ、命を捨て、戦ひけるに、太刀を打ちをりてければ、深き疵をかうぶりにけり。今はかうと見へけるに、大刀をすてて合掌し、高声念仏して敵のために身をまかせけり。云云。（『勅修御伝』巻二十六）